

特別寄稿

谷釜了正先生とスポーツ歴史学

尾川 翔 大（スポーツ危機管理研究所）

1. 人となり—大学院生のときの私から—

谷釜先生は、長らく日本体育大学のアカデミズムを象徴する存在であった。谷釜先生は、日体大に大学院が開設された翌年の1976（昭和51）年に日本体育大学に大学院担当の助手として奉職した。谷釜先生は、大学に務めはじめると同時に日体大のアカデミズムの只中にいたのであり、その責を退職まで貫徹したのである。2010（平成22）年に学長に就任して多忙を極めるようになってからも、2017（平成29）年に任期を終えるまで大学院の「スポーツ史特論」を担当していた。この約40年の間に、谷釜先生と共に学ぶ者が谷釜先生の影響を受けながら学者になっていった。また、日体大大学院の整備にも力を注がれた。現在の日体大大学院の研究体制が充実しているとすれば、それは、谷釜先生が学者として直接的あるいは間接的に尽力したからであると思う。

一方で、谷釜先生は大きな人間的魅力を持つ人としても語られる。学内で開催されたこの「スポーツと平和—オリンピックは平和の使者たりえたか—」では、これを聴くために学内外から多くの人が集まった。谷釜先生をよく知る諸先生方から、谷釜先生から数多くの恩を受けているという話をよく聞いている。そうした諸先生方は、院生に対して惜しみなく力を尽くされているし、実際に私が大学院に在学していたとき、谷釜先生を知る先生方からの学恩は計り知れないものがある。私が日体大の大学院生になったとき、谷釜先生はすでに学長として多忙を極める日々であったが、厚かましくも学長室を訪ねるとお忙しい中いつも話を

してくださった。

さらに、谷釜先生は、おそらく日体大の歴史を最もよく理解されている。それは、日体大に長らく在職したからという理由だけではない。日体大の歴史を執筆するという仕事を重ねてこられたのである。1987（昭和62）年に刊行された『チャンスの像とともに—日体ラグビー八十余年の歩み—』¹⁾は、谷釜先生が主導した仕事である。さらに、1991（平成3）年に刊行された『学校法人日本体育会百年史』^{2,3)}も谷釜先生を中心とする歴代の日体大体育史研究者によって完遂されたものである。総頁数1949頁を数えるこの大著は、日本体育大学の百年の歴史を史料に基づいて子細に辿ったものである。日本体育大学の歴史を紐解くことは近代日本の体育の歴史を紐解くことといくぶん近いといってよければ、この仕事は近代日本の体育の通史を描いたものとみなせるし、それは途方もないことだと思う。

2. 雄大な岸野学への道のり

1972（昭和47）年に日本体育大学を卒業された谷釜先生は東京教育大学大学院に進学され、そこで岸野雄三先生に師事した。岸野先生は、おそらく、現在の日本の体育史やスポーツ史の研究者の多くに影響を与えている碩学である。1973（昭和48）年に刊行された『体育史—体育史学への試論—』⁴⁾は、体育史やスポーツ史における古典になりつつあり、体育学の学説史や学問論として読めるものであることから体育哲学を始めとする近接領域でも参照されている。哲学出身の学者で

鋭い洞察、該博な知識、いくつもの語学を駆使し、ときには医者から医者と勘違いされたこともあったという。岸野先生の業績は、スポーツ歴史学にとどまらず、運動学、スポーツ技術論、スポーツ科学論、スポーツ歴史人類学など多岐に渡っている。その多くは、既存の枠組みを越え出て、新たな問題を創発する類のものであった。時代を捉え、尚且つ、時代に捉われない、そのバランス感覚が秀逸であったのではないだろうか。そして、岸野先生が見据えていたのは、おそらく「人類身体運動文化史」といいうる雄大なものであったと思う。

谷釜先生は、岸野先生の雄大な構想のいくつかを発展的に継承していったと思う。けれども、ある時、こんなことを言っていた。「岸野先生の成果を少しばかり超えたかなと思って大修館『体育史』なんかを読み直してみると、大体同じようなことがすでにチョロチョロって書いてあるんだよ」と。

2-1. スポーツ科学論

あまり知られていないかもしれないが、谷釜先生の修士論文はドイツのスポーツ史である。当時の東京教育大学体育史研究室は、古代ギリシア、近代ドイツ、近代日本の体育やスポーツの歴史をテーマにする者が多かった。卒業論文でドイツのガウルホーファーとシュトライヒャーの自然体育の歴史をまとめた谷釜先生が修士論文のテーマに選んだのは、ドイツのスポーツ科学史であった。修士論文の題目は「東ドイツにおける身体文化学（Körperkulturwissenschaft）の成立過程に関する研究」である。これは、体育学あるいはスポーツ科学とは何かという命題に対して学説史の方法に基づいてアプローチしたといえるものである。

谷釜先生の修士論文は、岸野先生の学問論を基底に据えている。岸野先生の主要な業績の一つはスポーツ科学（Sport Science）の学的アイデンティティを唱導したことであり、それは1977（昭和52）年に刊行された『スポーツの科学的原理』の第2章「スポーツ科学とは何か」⁵⁾に結実して

いる。これは、東京教育大学の筑波移転に際する体育学群の存続如何という現実的な問題に対峙しつつ、ドイツ語圏を中心に欧米の諸研究を参照しながら「スポーツ科学とは何か」という古くて新しい命題に対する回答を試みたものであり、スポーツが学問の対象とされていく同時代の世界的趨勢を見据えたスポーツ科学論であった。伝え聞くところでは、岸野先生の最終講義は、スポーツ科学の学問としての可能性を問うものであったという。

岸野先生の編集によって、1987（昭和62）年に『最新スポーツ大事典』が刊行された。これは同時代における日本のスポーツ科学の知を結集したものである。この事典の中に「スポーツ科学」の項目がある。この項目の執筆者は、岸野雄三・谷釜了正となっている⁶⁾。谷釜先生から聞くところによれば、当初は岸野先生が「スポーツ科学」の執筆を谷釜先生に依頼したそうだが、しかし、谷釜先生は、この項目の重みと大きさから断ろうと思ひ、岸野先生のご自宅を訪ねたという。そこで、岸野先生からニヤニヤしながらの説得を受けて、お二人の共著として落ち着いたそうである。

谷釜先生は岸野先生のスポーツ科学論を継承している。私が日体大博士後期課程に在籍していたとき、日体大の大学院生が集う授業で谷釜先生が「スポーツ科学」について講義する機会があった。人文・社会・自然の諸科学から構成される日体大大学院体育科学研究科の院生に対してスポーツ科学とは何なのかを講じたのである。このスポーツ科学論は、総合科学としてのスポーツ科学に固有の研究対象としてスポーツ現象を探求することを打ち出したものであった。

谷釜先生のスポーツ科学論は、スポーツに関する新たな学問や学会を考えるとときの起点の一つにされることもある。それは、岸野先生の「スポーツ科学とは何か」という問いを引き継ぐものとして現在も息づいていることを意味している。スポーツ科学の研究対象や研究方法の多様化現象が進展していることや、それを前提に、個々のスポー

ツ科学の枠を越えた学際的な研究が進展している⁷⁾ 現在にあって、谷釜先生のスポーツ科学論は揺らぎ続けるスポーツ研究者の足場を形成している。

2-2. 運動学・スポーツ技術論

修士論文でドイツのスポーツ史を取り上げたことからドイツ語を扱える谷釜先生は、1980（昭和55）年6月から雑誌『新体育』にG. シュティーターの著作の抄訳を連載した⁸⁾。シュティーターは、「球戯戦術論」に関する論文をもってドイツ体育大学で博士の学位を取得した。その審査には日本のスポーツ科学においていくらか馴染み深いK. マイネルも加わっていた。さらに、1985（昭和60）年にはH. デーブラーの著作を『球技運動学』⁹⁾として訳出した。デーブラーも、K. マイネルのもとで球技運動論に取り組んだ人物である。1960（昭和35）年に刊行されたマイネルの主著『運動学－教育学的スポーツ運動理論の試み－』¹⁰⁾は人間学的、教育学的視点とモルフォロジー的な方法を用いたものであり、同時代の旧東ドイツにとどまらず、世界中の注目を集めたものであり、今なお輝きを失わない運動学の古典である。

これら谷釜先生による一連の球技論の紹介は、1968（昭和43）年に岸野先生の編集によって刊行された『序説運動学』¹¹⁾の系譜に連なっている。『序説運動学』は、マイネルの運動学から構想されたものである。これは、「幻の東京オリンピック」において体操競技の日本代表であった岸野先生にとっての実存をめぐる問題として生まれたものと考えられるのだが、運動学というスポーツに固有の学問領域をアカデミズムに定位する先駆的かつ野心的な業績である。

さらに、1972（昭和47）年になると、マイネルの運動学に共鳴する岸野先生は『スポーツの技術史』¹²⁾を世に問うた。『スポーツの技術史』は、スポーツ技術（＝運動技術）というスポーツに固有の領域を歴史学に落とし込んで開拓していこうとするものであり、これも先駆的かつ野心的な業績である。それはまた、歴史学におけるスポーツ

歴史学の相対的な独自性と、スポーツ科学の専門学としてのスポーツ歴史学の位置づけを提示するものであったとみなすことができる。

夙に、運動学については、岸野先生の運動学の構想を引き継いだ金子明友先生によってとめどなく掘り下げられているが、『球技運動学』について谷釜先生は「『スポーツ』運動学の一領域として『球技』運動学を位置づけ、この邦訳書のタイトルを『球技運動学』」¹³⁾にしたと述べている。さらに、戦術と技術は相互に依存する関係であることから、谷釜先生が抄訳した「球戯戦術論」は、岸野先生の『スポーツの技術史』を敷衍したものとみなされる。谷釜先生は、スポーツに独自の学問領域として運動学を見出した岸野先生の構想を鑑み、球技に絞る戦術論も交えながらそれを押し広げることをも企図したのではないだろうか。谷釜先生は、岸野先生の運動学やスポーツ技術論を発展的に継承しているし、「球技戦術論」や『球技運動学』を前後して球技を歴史学的に検討している¹⁴⁾。さらに、シュティーターとデーブラーにI. コンツァクも名を連ねた『ボールゲーム指導事典』の翻訳にも携わっていた¹⁵⁾。

スポーツ技術やスポーツ戦術といったスポーツそのものを歴史学的に検討することこそが、岸野先生の構想でありかつ谷釜先生の継承したものであった。この谷釜先生の考え方は、スポーツそのものを検討する際にコアとなる運動学の観点を歴史学に落とし込んで各スポーツ種目のスポーツ技術、スポーツ戦術を検討するものであり、現在のスポーツ歴史学における問題の一つである¹⁶⁾。その意味で、岸野先生と谷釜先生の脈絡は確かにスポーツ歴史学に刻まれているといつてよい。こうしたスポーツ技術やスポーツ戦術を明らかにしようとするときに用いる資料は、実践感覚を伴ってスポーツを理解していなければ読み切れないところがあることも添えておきたい。

2-3. スポーツ歴史人類学

1980年代のいわゆる「ニュー・アカデミズム」

の渦中にいた谷釜先生は、雑誌『現代思想』の定期購読を通して時代潮流も見渡していた。『現代思想』の1986(昭和61)年5月号の特集に「スポーツの人類学」が設定されたこともあった¹⁷⁾。ニュー・アカデミズムの影の舵取り役であった三浦雅士氏が1994(平成6)年に刊行した『身体の零度－何が近代を成立させたか』¹⁸⁾を「発想が抜群におもしろいよね」と谷釜先生がいていた。翌年の多木浩二先生の『スポーツを考える－身体・資本・ナショナリズム－』¹⁹⁾もスポーツの人文・社会科学に対するインパクトは大きく、今も読まれ続ける著作である。その只中でスポーツ歴史学の在り方も模索していったように思うし、多かれ少なかれそこからスポーツ歴史人類学の構想も育まれていったのではないだろうか。

1986(昭和61)年のスポーツ史学会の設立を機に、この草創期の学会の中心的役割を担った谷釜先生は、1990年代に入ると稲垣正浩先生、寒川恒夫先生、野々宮徹先生とともに、スポーツ歴史学を超えて、スポーツ歴史人類学へと関心を広げていった。その主要な成果は、1991(平成3)年の『図説スポーツ史』²⁰⁾、1995(平成7)年の『スポーツ史講義』²¹⁾、1996(平成8)年の『図説スポーツの歴史－「世界スポーツ史」へのアプローチ』²²⁾である。これらの業績は、体育に主要な関心をおく既存の体育史を抜け出るものであり、今の地球のどこにでも、あるいは、いつの時代の人類であっても、そこには必ずスポーツ的活動の歴史があるという壮大な構想があった。

この壮大な構想を導いたのも、やはり岸野先生であった。ドイツ語圏を中心とする民族学の研究成果を取り入れながら1959(昭和34)年に刊行された岸野先生の『体育の文化史』の第1章「未開時代の体育」²³⁾は、今日でいうところのスポーツ歴史民族学に相当するものであり、これもまた先駆的かつ野心的な業績である^{24, 25)}。『体育の文化史』の影響を最も受けたのは寒川先生であったが、しかし、谷釜先生もまた岸野先生のスポーツ歴史人類学の構想を継承して、それを披歴してい

る²⁶⁾。さらに、谷釜先生は、歴史学と民俗学の研究方法を併用して、江戸山相撲の歴史を再構成すると同時に、その文化圏を明らかにしたこともある²⁷⁾。

こうした研究が進められた背景には、スポーツ史研究において歴史的史料が不足している時代のスポーツ的活動を再構成できるのではないかという期待から、スポーツ歴史民族学がスポーツ歴史学の補助的な学問になり得るのではないかという展望があった²⁸⁾。スポーツ歴史民族学がスポーツ歴史学で取り上げ難い時代を具体的に再構成できるかは別にしても、こうしたスポーツ歴史民族学の方法が、スポーツの歴史を明らかにするための有効な方法としてスポーツ科学における位置を獲得したことは確かであった^{29, 30)}。

2-4. 国民国家論・身体論・衛生及び衛生学

谷釜先生が岸野学へ挑戦し続ける途上で、しかし、独自の歴史観も練り上げていった。谷釜先生の歴史観を最も顕現しているのは、1994(平成6)年の「近代国民国家と体操運動～“体操の世界史”の形成と終焉～」³¹⁾であると思う。

1989(平成元)年のベルリンの壁の崩壊から始まるソ連・東欧の社会主義体制の崩壊、中国の天安門事件、フランス革命200年、そして、昭和天皇の逝去という一連の国内外の出来事は、歴史学において近代国民国家とは何なのかという問いを先鋭化させた。この動向を谷釜先生は見逃さなかった³²⁾。冷戦構造の解体という世界の同時代的状況を睨みながら、体操を通して近代国民国家とは何であったのかを問うたのである。谷釜先生は歴史学の潮流も視野に入れながら自らの歴史観を鍛え上げていったということができると思う。

そのスタンスは、「従来、われわれの間では、近代社会が、ひいては近代の国家が、体操やスポーツを近代的に仕立て上げたとする受身の見解が多く取られてきた。しかし、このあたりで、もう少し積極的な立場から体操やスポーツを捉えることを提案したいと思う。すなわち、近代の国民国家

の建設に果たした体操やスポーツの役割はすくなくないという立場から、体操やスポーツの歴史を改めて捉え直してみよう³³⁾というものであった。おそらく、スポーツ科学の一領域としてのスポーツ歴史学の立場から歴史学に対するインパクトを見据えての立場表明であったと思う。

しかし、谷釜先生は、国民国家論が隆盛するよりも前から、明治新政府による近代国家建設の方向性を浮き彫りにすることを構想していた。その嚆矢とみなされるのは、1980（昭和55）年に発表された「運動場の定型化の要因－小学校屋外運動場設置基準の法制化の過程（明治5－32年）に関する一考察－」³⁴⁾である。これは、明治以降に体育の奨励を図るための学校運動場が整備されていくプロセスを検討することを通して、明治新政府が衛生国家を目指したことを浮かび上がらせるものである。この近代日本と衛生をめぐる問題は、近代体育とは何であったのかという体育史の根底をなす問いが織り込まれており、対象を変えながら不断に展開されていく³⁵⁾。

近代国民国家とは何であったのかという問題を深化させる途上で、谷釜先生は、さらに身体論にも切り込んでいく。身体を切り口として人間を語る身体論は、1960年代から哲学のみならず、心理学、社会学、文化人類学、文学、芸術といった様々な領域あるいは超領域的に論議されている。90年代に入るとN.エリアス、P.ブルデュー、M.フーコーなどを摂取しながら日本のスポーツ社会学では身体を俎上に載せる論議が盛んになりつつあった。前掲した『身体の零度』では体育やオリンピックにも着目しながら近代的身体を論じており、それは、谷釜先生に少なからぬインパクトを与えたと思う。

この身体論を体育史領域に引き寄せながら、衛生学に着目して近代的身体の形成を論ずることを試みたのが1999（平成11）年の「衛生学が近代的身体の形成に果たした役割－日本の場合－」³⁶⁾である。これ以前の運動場の歴史や女子体育³⁷⁾に関する自らの研究成果を国民国家論に位置づけ

ながら、衛生学が近代的身体の形成に果たした役割を浮かび上がらせていったのである。

国民国家論、身体論そして衛生及び衛生学をキーワードに据えて近代日本の体育を歴史学的に検討する途上で深められた問題意識は、学位論文『明治期における日本人の身体の国民化の過程に関する研究－日本体育会の事業にみる国民体育の振興に着目して－』³⁸⁾に通底する問いとなる形で昇華されていった。そして、2005（平成17）年には、「衛生及び衛生学」が近代日本の体育史を読み解くキーワードであることを明確に指摘して世に問うたのである³⁹⁾。

国民国家論は、今なお、歴史学の問題の一角を構成している。2016（平成28）年に刊行された『岩波講座 日本歴史』の第22巻「歴史学の現在」では「『国民国家論』と日本史」として1章が割かれている⁴⁰⁾。近年では、国民国家論の射程を取り入れながら佐々木浩雄先生が集団体操を検討⁴¹⁾しているし、高嶋航先生、小野容照先生、金誠先生を筆頭に帝国日本とスポーツに関する研究⁴²⁾も積み重ねられている⁴³⁾。近代国民国家と体育やスポーツの歴史は、これからも深められてしかなるべき問題であろう。

3. オリンピック論

よく知られているように、近代オリンピックはフランスの貴族のピエール・ド・クーベルタンによって復興された。いくつもの問題を抱えながら、いまなお歩みを続けるオリンピックは、スポーツの政治的中立性を掲げながら、世界平和を目指した最初の試みであったというべきであろう。

グローバルイベントになったオリンピックを語る時、谷釜先生は、国民国家論とスポーツ歴史人類学を土台にしているように思う。おそらく、谷釜先生のオリンピック論が初めて明確に示されたのは、1996（平成8）年1月30日の国際会議「世界宗教とスポーツ文化」で「日本からのオリンピック改善提案」と題してシンポジストを務めたとき

である。これは、混迷する近代オリンピックの改善に向けて日本からの提案を試みるものであり、重く大きなテーマと対峙したのである。ここで出されたいくつかの提案の中でも、「これからは広い意味でのスポーツが含みもつエスニシティーやナショナリティーを大切」⁴⁴⁾にする必要があるという主張や、「スポーツにおけるクレオール化現象も近代の後に続く時代(=後近代)に大いなる知恵を提供する可能性をもっている」⁴⁵⁾という主張は、人類学的思考に基づいている。近代国民国家の揺らぎが見られた時代に、スポーツ歴史人類学の観点から近代オリンピックの相対化を試みていったといえよう。それは、異文化と対面したとき、それを理解し続けようとする生成的な相互作用を含む動態性をもつ文化相対主義という文化人類学の思考様式と結びついている。

さらに、谷釜先生はオリンピックの将来に向けて、その政治性の在り方についても考えを巡らせていく。もとより、谷釜先生は、「若人による平和の祭典として行うことを旨とした近代オリンピックは、一このこと自体が極めて政治的なのだが一、国威発揚の有力な手段に仕立て上げられた」⁴⁶⁾と述べている。クーベルタンの普遍主義的理念が、同時代の貴族の考えを反映したものであったことはすでによく知られている。近代オリンピックは、その始まりから政治性を帯びていたというべきであろう。

スポーツの政治的中立性という立場もまた一種の政治的立場である。スポーツは政治的に中立であると信じられている面があるからこそ、政治が戦略的に介入できる領野でもあるといえよう。オリンピックは、政治と経済のパワーがオリンピックの普遍主義的理念に流入することによって拡大してきたのである。そこで、谷釜先生は「オリンピックは国際政治を左右しうる力を蓄えたという立場から、政治には政治をもって応えるという、政治の介入を許さないという決意を固める必要がある」し、「逃れられない政治性を逆に利用するという発想を持つことも大切であろう」という⁴⁷⁾。

その意味するところは、オリンピックが政治から逃れられないのであるならば、否、オリンピックがその始まりから政治的であるのならば、それを断ち切ろうとするのではなく、戦略的に政治と付き合っていく方途を探る必要があるという点にある⁴⁸⁾。オリンピックが政治的であるということに向き合い続けなければならないのである。

この「スポーツと平和－オリンピックは平和の使者たりえたか－」が日の目を見る頃には、東京オリンピック・パラリンピック競技大会が眼前に迫っている。現代のオリンピックを考える方向性は、各々の意思や立場によって異なるが、その1つを挙げるなら、今を生きる人たちは、過去の成功だけでなく、過ちも財産として受け止めることであろう。目を覆いたくなる過去であるとしても、それを全面否定し、消し去ろうという清算主義的な思考は避けねばならない。その姿勢は、これまで数多くの人々によってなされたオリンピックに関する思索を踏みにじることに繋がる。

これまでになされた数多のオリンピックに関する語りには、オリンピックを無批判に促進しようとするものでなければ、オリンピックの優れた側面を無視した全面否定でもないはずだ。現実の社会のなかで様々な問題を抱えるに到った時々のオリンピックに危機感を抱き、その軌道を人類の未来への糧となることを願った現実との格闘の産物である。谷釜先生のオリンピック論も、現実との格闘の末に紡ぎだされたものであると思う。いつの日か、世界中が平和な日々を迎えるときが来るとすれば、谷釜先生がいう「天下和順・奥林匹克無用」となる日が来るのかもしれない。

(付記：個人的なことで恐縮ですが、多くの諸先生方を差し置いて、このような書き物をしてよいか迷いました。しかし、谷釜先生が日体大を離れる最後の年に日体大でスポーツ歴史学を学んでいたという私の個人的な経歴がこれを書かせるに至ったと思っています。)

註・引用および参考文献

- 1) 日本体育大学ラグビー部OB会編集委員会編『チャンスの像とともに－日体ラグビー八十余年の歩み』日本体育大学ラグビー部OB会, 1987年.
- 2) 日本体育会百年史編纂委員会編『学校法人日本体育会百年史』日本体育会, 1991年. ダイジェスト版として日本体育大学『近代日本の体育・スポーツ史の原風景－日体大への招待－』日本体育大学日本体育大学女子短期大学学長室, 1994年がある.
- 3) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』不昧堂, 1973年は, 木下秀明先生の手になるもので, 無論, この仕事も驚嘆に値する.
- 4) 岸野雄三『体育史－体育史学への試論－』大修館書店, 1973年.
- 5) 岸野雄三「スポーツ科学とは何か」朝比奈一男・水野忠文・岸野雄三編『スポーツの科学的原理』大修館書店, 1977年, pp.77-133.
- 6) 岸野雄三・谷釜了正「スポーツ科学」日本体育協会監, 岸野雄三編『最新スポーツ大事典』大修館書店, 1987年, pp.536-540.
- 7) 岡出美則「スポーツ系学会の現状とその課題」友添秀則編『現代スポーツ評論 特集:スポーツ科学の現在』第34号, 創文企画, 2016年, p.70.
- 8) 谷釜了正・稲垣安二訳「ZUR TAKTIK IN DER SPORTSPIELEN VON Günther Stiehler ギュンター・シュティエラーの『球技戦術論』(1～7)」『新体育』第50巻第6号～12号, 1980年6月～1980年第12号(ただし, 最終稿の7については51巻第1号に掲載される予定であったが, 同誌が休刊となったため, 小冊子として別に作成されている).
- 9) H. デーブラー, 谷釜了正訳『球技運動学』不昧堂, 1985年.
- 10) Meinel, Kult. Bewegungslehre : Versuch ein-
er Theorie der sportlichen Bewegung unter pädagogischem Aspekt. 1960. Auflage ; K. マイネル, 金子明友訳『マイネル・スポーツ運動学』大修館書店, 1981年.
- 11) 岸野雄三編『序説運動学』大修館書店, 1968年.
- 12) 岸野雄三・多和健雄編『スポーツの技術史』大修館書店, 1972年.
- 13) 稲垣安二・上平雅史・谷釜了正「訳者まえがき」H. デーブラー, 谷釜了正訳『球技運動学』不昧堂, 1985年, p.3.
- 14) 谷釜了正「『球籠遊戯』から「バスケット, ボール」へ: 大正3年以前のバスケットボール導入過程の一考察」『日本体育大学紀要』第7号, 1978年, pp.1-11; 谷釜了正「学校「球技」の成立事情: 球「戯」から球「技」への移行過程(明治40年代～大正15年)に関する一考察」『日本体育大学紀要』第12号, 1983年, pp.1-11.
- 15) G. シュティエラー, I. コンツァク, H. デーブラー, 唐木國彦監訳, 長谷川裕・谷釜了正・佐藤靖訳『ボールゲーム指導事典』大修館書店, 1993年.
- 16) スポーツ技術史やスポーツ戦術史を具体的に描くとき, 対象は必然的に一つの種目に限定されることから, この領域はスポーツ種目史と関連付けられおり, それは昨今のスポーツ歴史学の関心呼び起している. 2014(平成26)年の日本体育学会第65回大会の体育史専門領域のシンポジウムのテーマは「スポーツ競技・種目史のこれまでとこれから－その意義と課題」であった. 同じ年のスポーツ史学会第28回大会のシンポジウムは「スポーツ技術・戦術史の現状と課題」であった. 学会のシンポジウムで個別のスポーツ種目・技術・戦術の「これまで, 今, これから」が多角的に検討されたのである. 学問が専門分化していくように, スポーツ種目・技術・戦術の歴史を検討することはスポーツ歴史学の専門分化を促すものである. こうした領域を深める

にしても、その全体像を見失ってはならないことは、岸野先生と谷釜先生のスポーツ科学論で示されていることの一つだと思う。

- 17) 『現代思想』青土社、第14巻第5号、1986年。
- 18) 三浦雅士『身体の零度－何が近代を成立させたか－』講談社、1994年。
- 19) 多木浩二『スポーツを考える－身体・資本・ナショナリズム－』筑摩書房、1995年。
- 20) 寒川恒夫編『図説スポーツ史』朝倉書店、1991年。
- 21) 稲垣正浩・谷釜了正編『スポーツ史講義』大修館書店、1995年。
- 22) 稲垣正浩・寒川恒夫・野々宮徹・谷釜了正編『図説スポーツの歴史－「世界スポーツ史」へのアプローチ』大修館書店、1996年。
- 23) 岸野雄三『体育の文化史』不昧堂、1959年、pp.11-27。
- 24) 当時の岸野先生は、スポーツを学問の俎上に載せるには、まだ時代が追いついていないことを見抜いていたから、タイトルに「スポーツ」という語を入れることなく『体育の文化史』にしているはずである。岸野先生が、スポーツをアカデミズムに定位することを戦略的に試みていくのは、もう少し先のことであった。
- 25) 岸野先生は、1998（平成10）年に設置されたスポーツ人類学会の初代会長を務め『スポーツ人類学研究』に「人類学とスポーツ：スポーツ人類学とは何か」を寄稿している（岸野雄三「人類学とスポーツ：スポーツ人類学とは何か」『スポーツ人類学研究』第2号、2000年、pp.1-27）。
- 26) 谷釜了正「人類・スポーツ・歴史－スポーツの歴史人類学の可能性をめぐって－」『女子体育』第37巻第3号、1995年、pp.18-21；谷釜了正「祭日とスポーツ－スポーツの歴史人類学の視点から」『体育の科学』第45巻第10号、1995年、pp.762-765。
- 27) 谷釜了正・下谷内勝利「唐戸山神事相撲圏の形成に関する歴史的・民俗学的考察：藩政時代に於ける能登地方の名刹・本念寺とその仏事満座相撲が果たした役割」『体育学研究』第39巻第5号、1995年、pp.331-349。
- 28) 谷釜了正「スポーツ史関連領域」稲垣正浩・谷釜了正編『スポーツ史講義』大修館書店、1995年、pp.21-23。
- 29) 石井隆憲「スポーツ人類学の現在」石井隆憲編『スポーツ人類学』明和出版、2004年、p.13。
- 30) スポーツ歴史学とスポーツ人類学の関係については、日本体育学会第58回大会の体育史専門分科会とスポーツ人類学専門分科会の合同シンポジウムにおいて、司会の楠戸一彦先生のもと、シンポジストの高橋幸一先生と寒川恒夫先生によって議論されている（楠戸一彦・高橋幸一・寒川恒夫「オリンピック起源論：歴史学的アプローチと文化人類学的アプローチ」『体育史研究』第25号、2008年、pp.49-77）。
- 31) 谷釜了正「近代国民国家と体操運動～“体操の世界史”の形成と終焉～」『国民国家と体操運動－そのスポーツ史的背景－』平成5年度（財）水野スポーツ振興財団助成金研究成果報告書、研究代表者：松尾順一、1994年、pp.11-30。
- 32) 谷川穰先生と白川哲夫先生は、次のように述べている。「スポーツを歴史的に扱う際、日本の場合は一九三〇年代以降の総力戦体制との関わりに集中する傾向がある。人々の体位の向上が図られ厚生省も作られる。国民の身体への介入が国家によって最も集約的になされた時代でもあり、その点では十分な理由がある。他方で、一九八〇年代以降の社会史の隆盛や、九〇年代に盛んとなった国民国家論といった学問的潮流は、あまりスポーツの歴史研究に影響を及ぼさなかったのではないか。特に後者では、近代国家の形成期であった明治時代に、言語や食生活、音楽などを通じてさまざまな文化統合・国民形成がなされるが、運動・スポーツをその一つとして注目する研

究は必ずしも多くない」(谷川穰・白川哲夫「高校野球史の現在と可能性を探る」『「甲子園」の眺め方－歴史としての高校野球』小さ子社, 2018年, p.7). この指摘について、今の私からこの論考で言い添えておけることは多くはないが、それでも、谷釜先生を含む『国民国家と体操運動－そのスポーツ史的背景－』の執筆者陣は国民国家論を受け止めたうえで、体操やスポーツの歴史を考えたことだけは書き残しておこうと思う。

33) 谷釜, 前掲, 1994年, p.12.

34) 谷釜了正「運動場の定型化の要因：小学校屋外運動場設置基準の法制化の過程（明治5-32年）に関する一考察」『体育学研究』第24巻第4号, 1980年, pp.265-279. なお、雛形は、谷釜了正・見形道夫「日本に於ける運動場の変遷－明治に於ける運動場の変遷－」『「学校体育とスポーツ促進運動の歴史」－国際体育・スポーツ史東京セミナー報告書－<東京1978年9月26日～30日>』国際体育・スポーツ史東京セミナー大会組織委員会, 1981年, pp.130-134.

35) 谷釜了正「学校の運動施設に及ぼした学校衛生論の影響－三島通良の小学校屋外運動場に関する提言とその法令基準への影響の可能性－」『日本体育大学紀要』第10号, 1981年, pp.11-21.

36) 谷釜了正「衛生学が近代的身体の形成に果たした役割－日本の場合－」『衛生学が近代的身体の形成に果たした役割－日本の場合－』日本体育大学父母会平成10年度奨励研究費研究成果報告書, 1999年, pp.1-26.

37) 谷釜了正「三島道良の女子体育振興の論理－明治期における「女子」体育史研究の一環として－」岸野雄三教授退官記念論集刊行会編『体育史の探求－岸野雄三教授退官記念論集－』岸野雄三教授退官記念論集刊行会, 1982年, pp.278-297; 谷釜了正「女子体育の振興とナショナリズム－日本の女子スポーツ史に

おける「近代」の一断面－」『体育の科学』第39巻第9号, 1989年, pp.719-723.

38) 谷釜了正『明治期における日本人の身体の国民化の過程に関する研究－日本体育会の事業にみる国民体育の振興に着目して－』日本体育大学審査学位論文, 博士(体育科学), 2002年.

39) 谷釜了正「衛生及び衛生学：近代日本の体育史を読み解くキーワード」『体育学研究』第50巻第5号, 2005年, pp.525-532.

40) 今西一「国民国家論と『日本史』」『岩波講座日本歴史 歴史学の現在』第22巻, 岩波書店, 2016年, pp.231-258.

41) 佐々木浩雄『体操の日本近代：戦時期の集団体操と<身体の国民化>』青弓社, 2016年.

42) 例えば、高嶋航『帝国日本のスポーツ』塙書房, 2012年; 高嶋航『軍隊とスポーツの近代』青弓社, 2015年; 小野容照『帝国日本と朝鮮野球－憧憬とナショナリズムの隘路』中央公論新社, 2017年; 金誠『近代日本・朝鮮とスポーツ－支配と抵抗, そして協力へ』塙書房, 2017年.

43) 谷釜先生の論考の中で植民地主義とスポーツという問題に関するものには、谷釜了正「東アジアのスポーツ文化に及ぼした植民地主義の影響－日本のスポーツ史からみる東アジアの植民地問題－」『アジアのスポーツ文化に及ぼした植民地主義の影響』<財団法人>水野スポーツ振興会2001年度研究助成金研究成果報告書, 研究代表者: 高野一宏, 2002年, pp.45-53がある.

44) 谷釜了正「日本からのオリンピック改善提案」『新・スポーツ文化の創造に向けて－オリンピックを考える』ベースボールマガジン社, 1996年, p.242.

45) 谷釜, 同上書, p.242.

46) 谷釜, 前掲, 1994年, pp.12-13.

47) 谷釜了正「オリンピックは政治から逃れられないのか－オリンピックが宿命として持って

いる政治性を排除せよ」『スポーツ文化』創刊号，2003年，p.45.

- ⁴⁸⁾ 金メダリストの哲学者ハンス・レンクは「IOCは、政治上どの党派にも属さないオリンピックの中立性を保障するために、政治的手段を使って、オリンピック運動の超国家で国際的な性格を広めることについて活発に貢献しなければなりません。これは理念だけ説いてい

ては達成できません。積極的に政治的な手段を利用することによって達成できるのです」と主張している（ハンス・レンク，畑孝幸・関根正美訳「オリンピック競技者の人間学：オリンピック大会と競技者のための現代哲学に向けて」『体育・スポーツ哲学研究』第28巻第2号，2006，p.133）.

（受理日：2020年2月17日）